

特別助成 東日本大震災の被災者を元気づける事業（東日本大震災復興関連）

## 「海岸林再生プロジェクト10カ年計画」事業

### 津波で失われた宮城県名取市の生活インフラである 海岸林の再生を目指し行政・地元住民が連携

東日本大地震に伴う津波で東北の海岸林の約3,700haが失われた。宮城県名取市で、10年かけて100haの海岸林の再生を目指す壮大な計画が進められている。アジアなど地域開発への国際協力に50年以上の実績を持つ公益財団法人オイスカが中心となり、行政や地元住民とともに取り組むプロジェクトは5年目を迎えた。



植栽された26haの現場風景（2015年5月）



地元農家の人たちが育てた苗は優良苗と評判

#### 目標は100haに50万本 育苗から植栽、育林まで一貫施行

防風、防砂、防潮などの機能を発揮する海岸林は、沿岸に暮らす人々にとっての生活インフラとして欠かさない存在だ。とりわけ津波の被害が大きかった宮城県南部の名取市の海岸林は、伊達政宗の時代から400年にわたり営々と育てられ、「名取耕土」と呼ばれる一大農産地を育ててきた。海岸林の再生は、市民生活はもとより、農業の復興にも不可欠であり、「必ず海岸林を取り戻す」という地元の農家の強い想いがプロジェクト発足の根底にある。

「海岸林再生プロジェクト10カ年計画」は、震災のわずか一週間後、オイスカが海岸林再生の支援を林野庁に申し入れたことから実現した。国や自治体の復興計画に沿って、行政と民間の協働で「2020年までに約50万本のクロマツの育苗・100haへの植栽、2033年までの育林、その過程で約11,000人の地元の雇用の創出」を目標としている。

この海岸林再生事業がいわゆる公共事業と異なるのは、「取り組みの主役は地元住民」ということ。それは国際協力の海外現場での豊富な経験から培ってきたオイスカの理念でもある。プロジェクトの指揮をとるのは、途上国での大規模な植林などの経験がある吉田俊通さん。「将来にわたり地元の住民が愛着を持ってクロマツを守り育てられるように、地域の自助自立精神を醸成する活動でありたいと思っています。そのためにも公的資金は一切もらいません。全体で10億円規模の事業になりますが、寄付を募って民間の資金だけで成し遂げていきます」と話す。

プロジェクトを始動するにあたっては、雇用や生活支援を兼ねて、被災した地元の農家に農業経験を生かして苗木の生産・育成に携わってもらうことを行政に提案し、県や市とオイスカが協議を重ねた上で被災した農家で組織する「名取市海岸林再生の会」が2012年に発足した。これにより、育苗から植栽、育林までを一貫して行うことが可能になった。

#### 地元農家・森林組合・ボランティアの 完全分業体制を確立

これだけ大規模な事業ともなると、大勢の人の力の結集が必要になる。吉田さんは、まず中心となる現場や調査のスタッフ、広報などの人材をオイスカ内で組織し、さらに、地元農家、森林のプロ（森林組合）、ボランティア（年間約2,000人）の分業を明確にした。

「たとえば、植栽の作業では1人で1日300本もの苗を植えます。作業量的にとってもイベント感覚でこなせる仕事ではありませんから、これは森林組合のプロが行います。地元

の農家には育苗を担当してもらい、草刈りなどの作業に当たるボランティアも戦力と見なします。それによって使命感も湧きます。結局のところ、森づくりは人づくりなんです」

こうして2012年に種まきから本格的に始まったプロジェクトは、2014年に植栽がスタートし、昨年度は4～5月に予定していた5万本（10ha）の植栽を完了した。さらに、5月23日には地域の住民が植樹を体験する植樹祭が行われ、500人近い県民市民が参加してさまざまな想いをクロマツに託した。2015年度現在、13万本（26ha）のクロマツが名取市の海岸にしっかりと根付いている。



森林組合のプロによる植栽



月1回のボランティアの日には全国から100人近くが参加

助成団体: 公益財団法人 オイスカ

<http://www.oisca.org>



#### 無数のご支援に支えられて着々と計画を進めています

AJOSCをはじめ無数のご支援に支えられて、私たちは事業を続けさせていただいており、感謝のひと言に尽きます。おかげさまで、クロマツの活着率は99%を誇り、名取市の海岸で元気に育っています。プロジェクトを立ち上げてからは、涙あり笑いありのエキサイティングな5年間でした。これからもブレずに着々と計画を進めていきます。

公益財団法人 オイスカ  
啓発普及部 副部長 吉田 俊通さん